

17. 大学図書館の学習支援

同志社大学企画課

井上真琴

1. 教育から学習支援へ

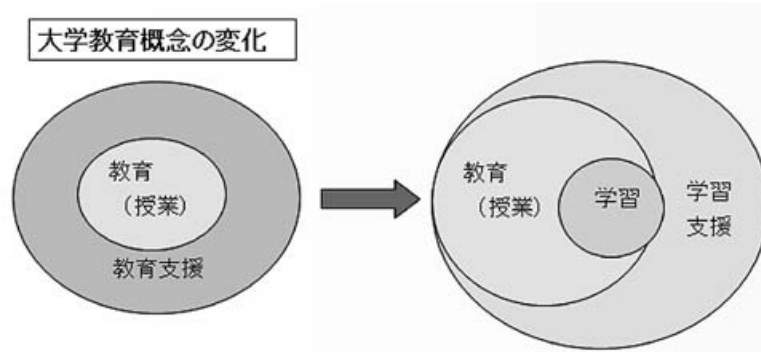
1.1 なぜ「学習支援」なのか

現在、日本の高等教育は「教育」から「学習支援」へとそのコンセプトを移しつつある。

インターネットの隆盛に象徴される高度情報化社会・知識基盤社会においては、伝統的な授業形式である「知識の伝授」よりも、学習者が自らの創造性を開発するよう誘導する学習支援に焦点が当てられるようになってきた。

大学行政管理学会初代会長を務めた孫福弘氏は既に15年前、2010年の高等教育界を予測して、「教育すなわち学習の主役は学習者としての学生であり、教室での授業の役割は、主として学習者の問題意識の喚起と指導助言機能、ならびに必要な応じた知的技法の付与におかれ、学習活動の中心部分は、キャンパスや街などの空間で学習者の主体的行為として営まれる」と謳っていた。

さらに「教員による良質の授業と同時に（中略）、学習者の主体的学習を効果的に支援する、組織化され制度化されたさまざまな仕組み、仕掛けがなくてはならないものになる。そしてこの過程では、従来の教育（授業）機能のある部分は、学習支援の装置の役割に移管されることになる」と喝破していたのである（下図参照）。



『大学改革 2010年への戦略』p.138より転載

ここでは、学習を促すものとして「教育（＝授業）」と「学習支援」の機能が、対等な重要性をもって「学習」機能を取り囲むという構図が成り立つ。学習者の創造性を開発する教育では、「授業」も一種の学習支援に過ぎない。この認識構造が学習支援を考えるうえで重要な鍵となる。大学職員が、そして大学図書館員が、学習支援に身を投ずる根拠はこの点にあるとよい。

何より、学生の学習こそが最優先の課題であり、教員は授業（＝学習支援の材料）の提供、職員は学習支援サービスの提供を通じて、ともに学習を支援する重要なパートナーの機能を共有し、協働することが求められるのである。

1.2 新しい教育手法への注目

教育コンセプトの変容の背景には、高等教育のグローバル化の波が横たわっていることを覚えておかねばならない。日本の高等教育も国際競争力に晒され、昨今では教育プログラムや卒業時能力の国際通用性を巡って、「教育の質保証」が声高に叫ばれている。

グローバル化社会では、「何を教えたか、何を伝えたか」よりも、学生自身が教育プログラムを通じて「何を学び、何ができるようになったか」が問われる。つまり、学習成果：Learning Outcomes の重視である。そのためには新たな教育手法の開発と導入が不可避になってくる。

また質保証に関連して、「単位の実質化」に向けていかに学生の教室外学習を担保するかも、日本の高等教育界では最大級の課題と認識されている。こうした課題群への対応は、学習支援の高度化と仕掛けの確立なくして全く語りえないはずである。

中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて（答申）」（2008.12）においても、「学生の主体的・能動的な学びを引き出す教授法を重視し、例えば、学生参加型授業、協調・協同学習、課題解決・探求学習などを取り入れる」ことが提言されている。教育が「知識の伝達」から「知識の創出・自主的学習」へと向かう潮流はここにも明白に現れている。

とはいえ、主体的・能動的な学びを引き出す教育手法は容易に普及するものではない。

アクティブ・ラーニング、PBL（Project/Problem Based Learning）、TBL（Team Based Learning）といった教育手法を実践するには、授業の設計・運営・評価の面で教員側にも相当な力量と負担を強いられ、教育プログラムの運営に携わる職員の支援能力や教学マネジメントの力量が問われることになる。

大学教員の教育力の組織的向上を目指す FD（Faculty Development）の研修プログラムでは、この種の授業を担当するための職能開発コースが準備され、教室外学習を誘発する指導、学生への課題の出し方や学生に「勉強させる」方法論も検討課題となっているが、これらは図書館の学習支援なしには実効性を持たないであろう。いまこそ積極的に大学図書館が教育改善や学習改善に貢献できること、学習支援で可能なことを積極的に主張すべき時であり、私たちはまたとない好機を迎えているのである。

1.3 学習支援サービスに向けて大学図書館員が学ぶべきこと

大学図書館はこの潮流に乗り、大胆な組織の再編と新しい学習支援サービス機能の開発を急がねばならない。これには学習支援サービスは既に十分実施しているとの反論があるかもしれないが、従来の情報リテラシー教育であれば、ガイダンス・講習会の実施、パスファインダー作成等に留まり、教員の授業補助にすぎないものが多く、学習支援の主役に躍り出るものではない。

大学図書館員は自学の教育内容やカリキュラムを分析することにより、従来の授業支援的なプログラムに加えて、学習者の学習プロセス全般に亘って直接アドバイスをを行い、教室内外の学習支援を強化するサービス体制を構築することを目標としなければならないのである。

ここで大切なのは、大学図書館員も教員と同様「人はどう学ぶのか」という学習理論、学習のメカニズムの基礎知識を体得する必要があることである。欧米における FD 推進の現場を見ると、教育力改善（＝学習支援力改善）には「図書館員を巻き込むべき」との意見が頻繁に発せられる。

また、大学図書館界が唱導してきたラーニング・コモンズに関しても、FD 関係者、高等教育研究者から熱い視線が注がれている。大学図書館が情報リテラシー教育を主軸とする学習支援サービスを考えていく以上、大学での教授法・教育手法のノウハウを取り入れ、学びを促す教え方とその具体的な実施手法を身につけることは教員同様に必要であり、そのことが教員と協働する接点となるであろう。

「大学図書館の整備について（審議のまとめ）」(2010)が指摘する通り、学習支援を担当する図書館員は、大学図書館員としての専門性に加え、「学習支援における専門性」「教育への関与における専門性」が求められる。それを体現しているのが、欧米の Blended Librarian や Embedded Librarian なのである。

2. 学習支援とラーニング・コモンズ

2.1 学びを誘発する“仕掛け”空間

大学図書館界に膾炙した観のあるラーニング・コモンズは、「知識が伝えられるだけの場」ではなく、学習者間や物理的な空間、教育ツール（用具）等との相互作用を通じて、「知識を再構成し創造する場」を大学図書館が提供し運営することを狙いとする。ラーニング・コモンズは、何かを学ぶだけでなく、目標に到達するにはどのように学べばよいかを（他者と協調して）学ぶ「メタレベルの学び」を体得する場、学習プロセス・学習マネジメントといった「学びの身体技法」を獲得する学習環境でもある。具体的な展開事例・構成要素等は参考文献を参照してほしい。

さてここで留意すべきは、欧米のラーニング・コモンズは、実践の共同体理論、状況論的学習理論等のコンセプトが体現されている空間であるということである。

ラーニング・コモンズの空間に一歩足を踏み入れると、グループワークを行う学生の様子が見取れる。グループ学習室はガラス張りが多いが、透明でオープンな空間の利点はなにか。それは学び方が「見える化」され、相互に触発される仕組みになっていることである。あるグループはコンセプトマップを白板に書いて、解決に向けて議論を行っている。またあるグループは、ブレインストーミング作業でひとつずつ問題を付箋紙に書きあげ、机の上に並べて分類作業をしている。また、あるグループは、何やらグラフかマトリクスをディスプレイに映し出して相談している。別の場所では、学生対象のワークショップが開催中で、通りがかりの学生が興味をもって何をしているのかとワークショップに吸い寄せられていく……。

それらを見て、「なるほど、あのよう分析するのか」、「グラフを作ればプレゼンテーションが効果的だな」、「作業計画をマトリクスにするのか」「今度、あのワークショップに参加したいな」と自然に目を凝らす。館内空間で展開される議論や作業が映し出す風景は、作業手順や学習の仕方を盗むよう促す。利用者相互の教育的な「気づきの場」であり、「学習のアトリエ空間」となっているのである。

あたかも創造現場の実況中継のように、学生やグループの活動が、リサーチの方法や作業プロセスが、相互に「見える化」されていることで、学生同士、教員と学生との双方向の反応が共有できればその連鎖の効果は大きい。決定的なのは、この空間に「思考過程の可視化と共有」が生まれていることなのである。

この空間はまた、情報リテラシーを育む空間でもある。授業で紹介される参考ツールやデータベースという「道具」はすぐに使いこなせるものではない。レポートの執筆やゼミ発表の準備を行うプロセスのなかで検索を行ってこそ、使いこなす実践知を得られる。リサーチの現場でしか、プロセスの渦中でしか学べない知識がある。講義で教えられる学術知や専門知は、図書館による人的支援（レファレンスや機器操作指導）を受けながら、具体的な学びの文脈のなかで実践知に変換されるのである。

これに対して、日本国内で先行してラーニング・コモンズを開設した大学の中には、教育と学習環境に関する認識不足により運営の停滞を招いているところもある。「箱」は作った、だがどのように運営すれば効果的な学習成果が期待できるのか。この検討が後追いになっている大学が多い。学生会館のおしゃべりの場所、飲み食い空間を図書館内に移設しただけで、「コモンズ（集合場所）は存在する。しかしラーニング（学び）はない」との呈をなすところもあろう。ともすれば、デザイン性豊かなデスクを配したグループ学習室、お洒落なカフェの併設等が話題になるが、その段階からは離陸し、学習効果を生み出す仕掛け空間として論じられるようにしたい。新奇的な空間デザインを案出すればよいのではなく、教授法理論や学習理論の裏づけをもって設計・運営されることが望まれる。日本のラーニング・コモンズはこれから正念場を迎えるのである。

2.2 運営に求められる力とは何か

さてラーニング・コモンズは、学習支援の人的サポートがうまく機能して、またFDの実践があってはじめて効果のある教育改善・学習支援ができる場である。特に、人的サポートを担当するスタッフには、「人はどのように学ぶのか」を学ぶことが求められる。英国の大学のFD委員長が繰り返し説くのは、「学生の学び方を理解してはじめて、教育方法を議論できる」ということである。つまり学習理論を知れば、どのような課題の出し方をすれば教育効果があがるのか、理解度を増す説明とは何かといった、良い学習成果を導く方法が分かると言う。

実際に私が学びのアトリエ空間と感じたものは、「認知的徒弟制」という学習理論で説明される。事実を学習する学校教育と違って、職人の親方と弟子たちが教え学び合うプロセス、技を盗むプロセスをモデルにした学習理論である。知識という道具を、実際の問題解決の場で使う親方や先輩の「考え方」（認知）を学ぶ点に焦点を当てた理論であり、問題解決の現場にいると実感を伴って理解できる。

また、プロの能力は「行為の中の省察」で磨かれると主張する「省察的实践」理論。情報リテラシー教育のプログラム開発に、「調べながら考え、考えながら調べる行為」とする視点を持ち込む重要性を教えてくれる。探索のさなかに「振り返り（リフレクション）」の習慣を身につければ、より文脈と状況に適った情報探索スキルの向上に繋がる。

単なる物理空間とお仕着せの学習支援サービスがあれば、ラーニング・コモンズが成り立つわけではない。学習支援を図書館が担いたいなら、無自覚な運営に陥りたくないなら、さらに教員と対等に議論したいのなら、学習理論を意識して運営を考えていく必要がある。

上記を理解した上で、今後最も困難な課題として挙げられるのは、ラーニング・コモンズにおける人的サポートの組織編制とマネジメントであろう。広範囲に亘る学習支援を展開するには、

図書館のみで運営をまっとうするのは無理である。関連組織（ライティング・センター、ITセンター、FDセンター等）との協力体制を築き、TA（Teaching Assistant）の有効活用や学生同士のピア・サポート活動を仕掛けるマネジメント能力が図書館側に欠如しているならば、こうした空間は機能しない。この課題には、関係スタッフの能力育成プログラムの開発（例えば TAD：Teaching Assistant Development プログラム等）や、その継続した実施体制の確立をどう実現するかという事項も付随してくることになる。

これらの問題群を受けとめながら、いかにうまく人的サポートスタッフのコミュニティ形成を導くか、関係組織のコラボレーション機能をどう高めるのか。中長期的な展望に立って、粘り強く実践を重ねていく覚悟を私たちは持たねばならないであろう。

3. 学習支援としての情報リテラシー教育

大学図書館での情報リテラシー教育の実践は、例えば初年次教育の隆盛と歩調を合せ、着実に蓄積が重ねられている。筑波大学編『今後の「大学像」の在り方に関する調査研究（図書館）報告書：教育と情報の基盤としての図書館』（2007）の詳細な統計をみれば、大学の規模別・性格別に多彩な実施状況をうかがえ、既に大学図書館における情報リテラシー教育の定着は明らかである。

とはいえ、まだまだ図書館ガイダンス、データベース検索講習会等のメニューを揃え、とにかく実践を積み重ねている段階に留まっており、学習効果や目標達成評価を測ることや、情報リテラシー教育プログラムそのものの質やデザインを問うまでには至っていないところが多いのではないだろうか。広報を工夫し、参加者を集め、日本図書館協会の「図書館利用教育ガイドライン」を参照しながら試行錯誤を重ね、実績を積み上げている段階といえよう。

『学術情報基盤の今後の在り方について（報告）』（2006年）による評価は、「現時点で、多くの大学で行われている（図書館の）情報リテラシー教育は教養教育及び各専門分野における教育との連携が不十分であり、効果が限定的である」としている。この指摘の背景には、利用者の学習行動の理解や教員の教育手法との接合に脆弱さがあり、図書館が「個別に」「単発に」開催する“局地戦”としての情報リテラシー教育であるとの認識が横たわっているように思えてならない。今後「組織的に」「計画的に」「体系的に」、教授法や学生の学習方法と密接にリンクした情報リテラシー教育プログラムを実施するには、私たちは多くの教育関連要素を学ばねばならない。

3.1 学習傾向の把握と全プロセスに亘る支援

繰り返しになるが、まず利用者の学び方、学習傾向の理解と把握がなければならない。

昨年米国のワシントン大学の研究者が実施した調査報告：Project Information Literacy Progress Report (25大学・8353名の学生を対象にした情報活用に関するアンケート調査と分析) は実に興味深いものであった。

それによれば、リサーチ活動を展開する上で学生が最も難しいと感じている事項として、1) 初動調査を始めること (84%)、2) トピックの明確化 (66%)、3) トピックの絞込み (62%) が上位を占めた。日本でも同様の傾向が見てとれるが、こうした観点から、情報源の入手方法というよ

りは、入手した情報源をじょうずに取り扱ってテーマを絞り出し、フォーカスを形成するプロセスに焦点をあてることこそ、学習支援の対象ではないかと思われてくる。

調査報告書でも、最後の提言の章で、情報源紹介に焦点をあてた図書館員研修は再考されるべきであり、むしろ学生のリサーチ戦略の組み立てや、探索時の思考の道筋を指導できる能力を開発すべきだと強調している。つまり、初動調査からアウトプットに至るリサーチの全プロセスに注目して、情報リテラシー教育を展開する能力開発を提言しているのである。

彼我の情報環境・教育環境は異なり、そのまま鵜呑みにはできない。しかし私たちも同様に、日本の学生の学習行動を注意深く観察しながら、表面的な学生のデマンドではなく、学習ニーズの本質を汲み取ったプログラムを考案する必要がある。

インターネット情報源が遍在し、利用者が容易に情報源を発見できる環境下では、情報源の紹介から多様な情報源を総合的に活用し利用者の問題解決を支援する、踏み込んだ情報リテラシー教育へと移行せざるをえない。利用者の学習の全プロセスを通じて、情報を読み解き、問いを立て、新たな知識を創造する体験を支援する情報リテラシー教育プログラムが、今後は求められるであろう。

3.2 FDとの接点

さらにFDとの接点も忘れてはならない。NII主催「学術情報リテラシー教育担当者研修会」の研修プログラムは、教員のFD研修で説明されている学習理論・教授法を紹介するコマが含まれるカリキュラム編成になり、講師の顔ぶれには、FD開発センターや教育開発センターの教員が並んでいる。ワークショップのコースデザインや実施方法、協調学習の理論やフレームを情報リテラシー教育に応用できるようになるには、従来の図書館の枠を超える領域まで学ばねばならないのである。

これまでの大学図書館員の多くは学習理論や教授法に疎く暗い。この状況下で、学習支援の名のもとに情報リテラシーを「教える」のは無謀でもある。FD活動との協力体制を築くマネジメント能力、リエゾン能力を開発し、協働するなかから質の高い情報リテラシー教育プログラムを提示していく努力を続けていかねばならない。

従来の大学図書館での実践例を蓄積しつつ、情報源紹介・操作法解説から脱皮し、現在は教育プログラムや学習支援と連携したアプローチへと離陸すべき時期に差しかかっている。「知識の蓄積」よりも、「知識を使う」能力を重視する高等教育が展開されるなかで、どのような情報リテラシー教育が有効なのか。大学図書館の永遠の、しかし喫緊の課題なのである。

《参考文献》

- ・孫福弘．“大学運営のリエンジニアリング．” 大学改革 2010 年への戦略．PHP 研究所，1996，p. 127-153.
- ・中央教育審議会．“学士課程教育の構築に向けて（答申）”．文部科学省．2008-12-24．http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm，

(参照 2011-06-08).

- ・ 科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会. “大学図書館の整備について(審議のまとめ):変革する大学にあつて求められる大学図書館像”. 文部科学省. 2010-12-01. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm, (参照 2011-06-08) .
- ・ 米澤誠. 研究文献レビュー 学習・教育基盤としての図書館動向レビュー. カレントアウェアネス. 2008, no.296, p.26-28.
- ・ 美馬のゆり, 山内祐平. 「未来の学び」をデザインする:空間・活動・共同体. 東京大学出版会. 2005, 233p.
- ・ 山内祐平編. 学びの空間が大学を変える:ラーニングスタジオ/ラーニングcommons/コミュニケーションスペースの展開. ボイックス (株). 2010, p.186.
- ・ 米澤誠. 動向レビュー インフォメーション・commonsからラーニング・commonsへ:大学図書館におけるネット世代の学習支援、カレントアウェアネス. 2006, no.289, p.9-12.
- ・ McMullen, S. US Academic Libraries : Today's Learning Commons Model. OECD. 2008. <http://www.oecd.org/dataoecd/24/56/40051347.pdf>, (参照 2011-06-08).
- ・ 特集, ラーニング・commons. 名古屋大学附属図書館研究年報. 2008, no.7. 70p
- ・ 井上真琴. 特集, 学習環境としての大学図書館:「学びのマネジメント」を支援する. IDE. 2009, no.510, p.11-15.
- ・ 井上真琴. FD 活動との接点から図書館を視る:ラーニング・commonsを例に. Maruzen Library News, 2009, no.7/8, p.12-13
- ・ 筑波大学編. 今後の「大学像」の在り方に関する調査研究(図書館)報告書:教育と情報の基盤としての図書館. 2007, p.113-122. <http://www.kc.tsukuba.ac.jp/div-comm/pdf/future-library.pdf>., (参照 2011-06-08).
- ・ 野末俊比古. 研究文献レビュー 情報リテラシー教育:図書館・図書館情報学を取り巻く研究動向. カレントアウェアネス. 2009, no.302, p.18-24
- ・ Head, Alison J.; Eisenberg, Michael B. Truth Be Told: How College Students Evaluate and Use Information in the Digital Age. Project Information Literacy Progress Report. University of Washington's Information School, 1 Nov. 2010, 72p. http://projectinfolit.org/pdfs/PIL_Fall2010_Survey_FullReport1.pdf, (参照 2011-06-08).

大学図書館の学習支援

同志社大学企画部・企画課長
社会学部嘱託講師「学術情報利用教育論」

井上真琴

minoue@mail.doshisha.ac.jp

本日のまとめ

1. 高等教育改革とFD推進の文脈のなかで
大学図書館の学習支援を捉える。
※教育の質向上,授業改善での連携の接点を紡ぎだす
2. 「人はどう学ぶのか」=学習理論に立脚して
学習支援のプログラムを企画・立案する。
※学習科学・教育工学等の理解,利用者行動の観察
3. 情報源サービスから「学びの体験」サービス
への転換を理解する。

I. 教育から学習支援へ

教育から学習支援へ

教育コンセプトの転換

「知識の伝授」(授業)

Professor = Profess(告白)する人 x



学習者自らの「創造性開発」(学習支援)

※教育(=授業)と学習支援が対等な関係

I. 教育から学習支援へ

学習支援にシフトした背景

- ▶ 高等教育のグローバル化
高等教育の国際通用性(教育の質保証)
Learning Outcomes重視:「~ができるようになる」
- ▶ 高等教育のユニバーサル化
全入化と18歳人口の減少
- ▶ 社会の情報化:知識基盤社会
知識の「注入」よりも,知識の「創造性開発」

I. 教育から学習支援へ

押えておくべき「答申」類

- ▶ 2008年12月24日
中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて(答申)」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm
(参照2010-09-25)
 - ▶ 2005年2月1日
中央教育審議会「我が国の高等教育の将来像(答申)」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101/010.htm (参照2010-09-25)
 - ▶ 1998年10月26日
大学審議会「21世紀の大学像と今後の改革方策について(答申)」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/daijaku/toushin/981002.htm
(参照2010-09-25)
- *****
- ◎科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm
(参照2011-07-10)

◎科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会

「大学図書館の整備について」(審議のまとめ)
—変革する大学にあって求められる大学図書館像—

2010年12月3日

1. 大学図書館の機能・役割及び戦略的な位置付け
(3)大学図書館に求められる機能・役割
①学習支援及び教育活動への直接の関与
2. 大学図書館職員の育成・確保
(2)大学図書館員に求められる資質・能力等
①大学図書館職員としての専門性
②学習支援における専門性
③教育への関与における専門性
④研究支援における専門性

I. 教育から学習支援へ

FD活動の活発化と研修内容

FD(ファカルティ・ディベロプメント)＝
教員の組織的な教育力向上に向けた持続的な活動

- ▶ わかりやすいシラバスの書き方
- ▶ 授業デザインを学ぶ
- ▶ 授業アンケートのフィードバック方法
- ▶ クリッカーを利用した効果的な授業実践
- ▶ PBL,TBLの授業(ファシリテーション)方法
- ▶ 学生のやる気をださせる話し方講座
- ▶ よい学習行動を導く「課題の与え方」

I. 教育から学習支援へ

例えば,単位の実質化(1)

単位:Credit(信用!)

1単位の授業科目は,標準的に15時間の授業と
30時間の準備学習や復習の時間を合わせて
45時間の学修を要する教育内容をもって構成さ
れている。

大学評価・学位授与機構
『高等教育に関する質保証関係用語集』
http://www.niad.ac.jp/n_shuppan/package/no9_21_niadue_glossary_2009.pdf
(参照2011-07-10)

※文部科学省の「大学証明」の話(詐欺の片棒を担ぐ?)

I. 教育から学習支援へ

新しい教育手法の推奨

学生の主体的・能動的な学びを引き出す教授法(アク
ティブ・ラーニング)を重視し,例えば,学生参加型授業,
協調・協同学習,課題解決・探求学習,PBL
(Problem/Project Based Learning)などを取り入れ
る。大学の実情に応じ,社会奉仕体験活動,サービス
ラーニング,フィールドワーク,インターンシップ,海外体
験学習や短期留学等の体験活動を効果的に実施す
る。学外の体験活動についても,教育の質を確保する
よう,大学の責任の下で実施する。

中教審「学士課程教育の構築に向けて(審議のまとめ)」(2008)

II. 学習支援とラーニング・コモンズ

課題:情報リテラシーと学習スキルを
獲得できる学習環境を提供する

話題の《ラーニング・コモンズ》

- ・創造的空間として物理環境
- ・学習の文脈に応じた人的支援

参照:井上真琴,「学びのマネジメント」を支援する。
IDE.2009,no.510, p.11-15.

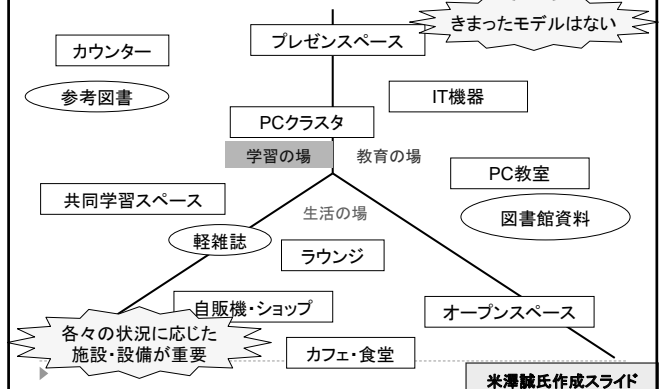
II. 学習支援とラーニング・コモンズ

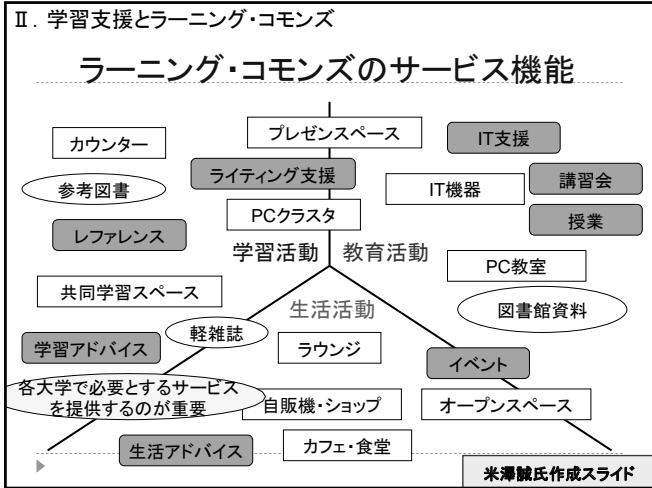
学習空間のもつ特徴

- ▶ 柔軟性(Flexibility):
可変性のある空間,組合わせの型の机,持ち運び可能な
ホワイトボードほか <http://www.youtube.com/watch?v=GcplPEs5NLU&feature=related>
- ▶ 快適性(Comfort):
長時間滞在が可能な休憩ラウンジやカフェ
- ▶ 感覚刺激性(Sensory Stimulation):
ガラス張りの部屋,オープンスペース空間
※認知的徒弟制,正統的周辺参加,アトリエ空間学習
- ▶ 技術支援(Technology & Skill Support):
PCサポート,ライティングサポート,情報探索サポート,
ワークショップ開催ほか プレFDに結び付ける

II. 学習支援とラーニング・コモンズ

ラーニング・コモンズの構成要素





II. 学習支援とラーニング・commons

Beagleのcommonsの四段階

第1段階: 適応としてのIC
 情報通信技術の適応だけしている状況

第2段階: 孤立した変化としてのIC
 第1段階が進化して、リソースの発見からデータ処理、プレゼンテーションや出版の段階までサポートするようになったもの

第3段階: 広範囲に及ぶ変化としてのLC
 FDセンター・教授学習センターとの連携、図書館の電子リソース統合、CMS統合、バーチャル・レファレンス実施
 ※図書館中心ではなく、教育に関する機能に統合・協同

第4段階: 転換的な変化としてのLC
 全学的な体制として位置づけられ、教育のイノベーション(カリキュラム見直し、横断型のプロジェクト)を伴う

山内祐平, "大学の学習空間をデザインする", 『学び』の認知科学事典, 大修館書店, 2010, p. 239-249

II. 学習支援とラーニング・commons

「commonsはある。ラーニングはない」

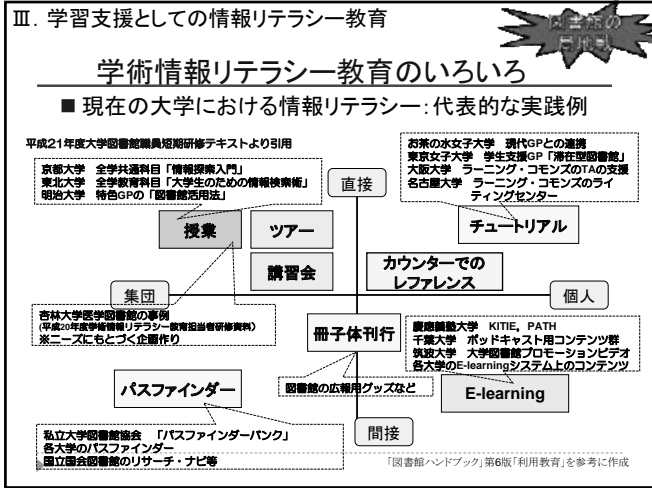
- ▶ 同志社大学副学長
 commonsはある。ラーニングがない。
 しかし、具体的にどうすればよいのか言語化できない。
- ▶ 山内祐平先生(東京大学)
 学習支援[の内容]より空間整備が先行している。
 米国・ラーニングセンターの実施サービス

アカデミックなテスト・評価	広報
学習スキル・学習ストラテジー	教材(紙・視聴覚)
チュータリング(ドロップイン・予約)	スタッフやチューターのトレーニング
チーム学習	情報端末機
電子教材	相談とカウンセリング
リメディアル教育コース	他の大学サービスへの接続

III. 学習支援としての情報リテラシー教育

これまでの学習支援,いろいろ

- ▶ 情報リテラシー教育:
 ガイダンス, 利用講習会, 授業補助,
 パスファインダー作成, レファレンス
- ▶ 仮想環境構築: OCW, VLE連携, eラーニング
- ▶ 学習用コレクションの構築
 学習用図書の選択, データベース契約提供
- ▶ 開館時間延長, 休日開館
- ▶ その他(ILL無料化など)
 「局地戦」では?



III. 学習支援としての情報リテラシー教育

課題: 学術情報リテラシー教育を 学習支援の視点から捉える

○コンピュータ利用, 情報探索・情報検索に関わるスキル
 情報を入手するには, 入手するためのツール(道具)をよく知り, その使い方を学ぶことである。

↓

○ツールスキルから情報利用のメタ・スキルへ
 上記に加え, 入手した情報・資料の可用性を検討したり, 批判的に読み解き分析して, 具体的な知的成果物を創造するプロセス全体に亘るもの(=問題解決能力)をプログラム化

Ⅲ. 学習支援としての情報リテラシー教育

情報リテラシーの定義

情報リテラシーを持っている人は、つまるところ、学習の方法を知っている人である。学習の方法を知っているのは、情報がどのように構造化されているか、情報をどのように見つけるか、どのように利用すれば他人が自分の成果を摂取して学んでくれるかを知っている。

また、どのような作業や判断においても必要な情報を見つけることができるので、生涯を通じて学んでいく。

ALA, *Presidential Committee on Information Literacy, Final Report (1989)*

Ⅲ. 学習支援としての情報リテラシー教育

ゆきづまりと喫緊の課題

◎教育との結びつきの希薄さ

- ▶ 効果がきわめて限定的
- ▶ 教育手法の問題／情報リテラシーを備えるべき、主体的な問題解決型の学習がない。
- ▶ 図書館がどのように、学生の学習成果の実現に寄与できるのか。

文科省ヒアリングでの永田治樹先生のご指摘(2005.2.15)

「Ⅱ. 学術情報基盤としての大学図書館等の今後の整備の在り方について」
(科学技術・学術審議会 2006.3)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/06041015/011.htm
(参照2011-07-10)

Ⅲ. 学習支援としての情報リテラシー教育

アクティブラーニングの手法を
情報リテラシー教育に取り込めるか

2000年～2005年頃のALAの議論
情報リテラシー教育をアクティブラーニングで、
展開できるかどうか。



何が必要なのか？

Ⅲ. 学習支援としての情報リテラシー教育

焦点をどこにおくか？

スキルの種別	印刷体資料	電子化資料 (データベース/ウェブサイト)
1.情報源を知る (何があるのか)	・『日本の参考図書』 等のガイドブック ・各種主題別紹介資料 ・書誌・目録	・OPACの存在 ・ポータル参照 ・パスファインダー参照
2.情報源の使い方を知る (どう使うのか)	・凡例読解 ・編集方針/編集形態	・検索方法/検索スキル ・インデクシング方法 ・各種演算子
3.総合化した情報源利用 (なぜ使うのか、どう 組み合わせるのか)	調べ方の「考え方」：メタ思考 ↑ (行為のなかの省察)	

Ⅲ. 学習支援としての情報リテラシー教育

欧米と日本の学習支援スタッフの違い

学習支援に必要な能力

1. 支援するひとが、インストラクショナル・デザインや学習環境理論を知っている。
2. 教授法・教育手法をはじめ、学習理論＝「人はどう学ぶのか」を学んでいる。

※正統的周辺参加, 認知的徒弟制, アンカードインストラクション, ジグソーメソッドほか

上記のことに基づいた企画, 設計, 運営

Ⅲ. 学習支援としての情報リテラシー教育

Blended Librarian, Embedded Librarianに学ぶ

Blended Librarianの定義:

図書館スキルをIT技術, 授業設計技術, 教育工学等と結びつけて大学の教育現場で活躍する図書館員

The Blended Librarian.

<http://crln.acrl.org/content/65/7/372.full.pdf> (参照 2011-06-06)

ワークショップのような実践的な情報リテラシー教育が実行でき、情報の特徴や信頼性を批判的に評価することを、学生のリサーチプロセスの全領域に関わって指導することができる。

Ⅲ. 学習支援としての情報リテラシー教育

「知ること」と「行うこと」は分割不可能

- ▶ 「知ること」と「行うこと」との間を理論的に区別するというのは深刻な誤解である(分割不可能)。
- ▶ 実践者は、問題をそれが創造された文脈から取り出して、それに無関係な枠組みを与えるのではなく、問題をそれが生み出された文脈の枠組みの中で解決することにきわめて熟達している。
- ▶ 固定的な定式や答えを求めるのではなく、事例と探究・省察の積み重ねを体験し、そのプロセスから学びとる。

《状況論的アプローチ》

Ⅲ. 学習支援としての情報リテラシー教育

発想の転換が必要なのでは？

情報源提供サービス

+

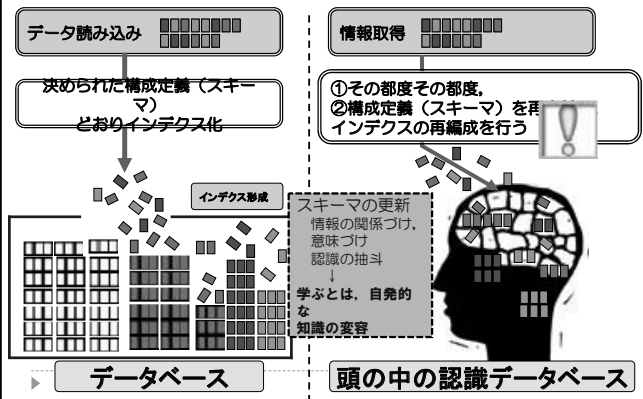
多様な学びの体験サービス

“知の身体技法”の獲得支援

図書館は提供する「モノ」よりも
そこで起こる出来事「コト」を重視したい

Ⅲ. 学習支援としての情報リテラシー教育

学習(学ぶ)とは何か ≡ 情報リテラシー



Ⅲ. 学習支援としての情報リテラシー教育

学術情報リテラシー教育の課題

- ▶ 実際の問題解決の文脈に埋め込んだ情報リテラシー教育プログラムの実施へ
Course-Related Approachが可能な領域(初年次教育など)
Research Assignmentが基本となっている領域(PBL科目など)
- ▶ 情報探索作業や論文作成作業の全プロセスを含んだ、学生とゴール達成を共有する運営体制
- ▶ 図書館活用を組み込んだ教育改善(FD活動)の提案ができる能力を
図書館の役割を理解し教育に組み込んでくれる教員づくり。
FDのアプローチを取り入れた支援を実施。